図表１　仰韶文化彩陶・馬家窯文化彩陶

仰韶文化半坡遺跡彩陶 左は魚文の盆（鉢）。 右は半坡土器に特徴的な人面魚身文盆		
馬家窯文化（甘粛、青海など西方の仰韶文化）彩陶		

図表２　大藷繻蔑ｶ化筒型土器・龍山文化丞ｵ・龍山文化黒陶高足杯

左は大藷繻蔑ｶ化期の筒型土器。透かし彫りは大藷繻福ﾙか東部文化に特徴的。貯蔵などの実用性はないので、装飾、祭祀用と考えられる。 中は山東龍山文化期の丞ｵ（き）。 右は龍山文化期に特徴的な黒陶高足杯（卵殻黒陶）	

大藷繻繒ｏ土陶器の図象の拓本
封泥「皇帝信璽（ふうでい　こうていしんじ）　前漢時代

解説
封泥とは中国古代に用いられた封印の一種である。四角い穴を切った検と呼ぶ木の板を文書や器物の上に載せて紐で縛り，紐の上から穴の中に粘土を押し込んで，官職や氏名を刻んだ印を捺した。あるいは検を使わず紐に粘土の固まりを付けて捺印することもある。粘土が乾いた後は，封泥を壊さない限り，紐を密かに解くことはでない。この封泥は皇帝の印が押された希有のものとして古来有名なものであり，中国の印章制度や漢字の変遷を研究する上で貴重な資料である。

秦漢　瓦当文字
長沙筆（ちょうさひつ）
長沙筆と居延筆
「金剛般若波羅密経」868 年　現存最古の木版印刷き

（筆の基礎知識）筆の歴史１

■筆の起源
秦の蒙悟（もうてん）将軍が筆を初めて作ったという説が有名ですが、実際には殷時代（前 1600 頃～前 1028）の甲骨片に筆を用いたと思われる文字が書き残されており殷代あるいはそれ以前から筆があったことが知られます。さらに新石器時代末期の彩陶にも毛筆状のもので描いたと思われる文様があり、筆の存在を推測することができます。

現在確認できる最古の筆は、戦国時代の楚（？～前 223）の遺跡から発見された「長沙筆ちようさふで」です。約 16ｃｍの細い竹軸の一端を裂いて、兎毫を挟み、糸でくくりつけられて、漆で固められています。また漢代の木簡とともに発見された「居延筆きょうえん筆」（前 75～57 と推定）は、約 21ｃｍの木軸の一端を四つ割にして、1.4ｃｍの穂を差し込み糸で縛り、漆で根元を固めてあります。毛の種類ははっきりしませんが、筆としてかなり完成した姿をしています。

左：最古の筆「長沙筆」の複製

右：漢代の木簡とともに発見された「居延筆」

資料提供：芸術新聞社「墨スペシャル２６　文房四宝の楽しみ」より